國學院大學学術情報リポジトリ

公開講座記録　第一回「しぶカフェ」（共生社会×渋谷カフェ）「シブサス：東京渋谷で進む環境にやさしいまちづくり」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古沢, 広祐 , 松嶋, 範行, 佐藤, 龍彦, 俵, 里奈, 秋野, 淳一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001505

《公開講座記録》

第一回「しぶカフェ」（共生社会×渋谷カフェ）

「シブサス　―東京渋谷で進む環境にやさしいまちづくり―」

令和四（二〇二二）年度に実施した第一回「しぶカフェ」は、「シブサス　―東京渋谷で進む環境にやさしいまちづくり―」をテーマとして、國學院大學研究開発推進センターにおいて推進する「〈ＳＤＧｓ〉と建学の精神」研究事業、渋谷学研究会の主催により録画配信にて開催された（國學院大學公式ＹｏｕＴｕｂｅチャンネル〈動画アーカイブ〉にて公開）。本記録は、その第一回「しぶカフェ」の内容をもとに、令和五（二〇二三）年時点における最新情報等を加筆修正のうえ、編集したものである。

本センターにおいて実施する「しぶカフェ」（正式名「共生社会×渋谷カフェ」）とは、現代日本を象徴する場所といっても過言ではない（『渋谷学叢書4　渋谷らしさの構築』雄山閣、平成二七〈二〇一五〉年）、「多様性」のまち・「渋谷」を学際的に科学する「渋谷学」と、持続可能な「共生社会」へとつながる「共存社会の構築」について考える「共存学」の取り組みを融合・発展させることを目途にした緩やかな学びの場（公開講座）である。ここでいう「カフェ」とは、パソコンやスマートフォンなどの画面の前でリラックスしながら、初めての方でも気軽に学びを始められる場をイメージしており、「しぶ」とは、國學院大學の立地する「渋谷」と、國學院大學の「伝統文化」に関する研究教育を「渋

さ」と捉え、これらを重ね合わせた意味を持たせている。

本センター主催により開催する「しぶカフェ」とは、右のようなコンセプトにより、「多様性」と「共生社会」をキーワードに、渋谷に通う学生、会社員、来街者、渋谷区民、渋谷に関心のある方を主な対象として、さまざまな発見と話題提供者を交えながら、持続可能な社会、サステナブルな生き方、ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）について考える機会として企画した試みである。

記念すべき第一回目の「しぶカフェ」では、渋谷のまちの持続可能性につながる「シブサス」（シブヤサステナブル推進協議会）の関係者の協力のもと、「東京渋谷で進む環境にやさしいまちづくり」をテーマとして対話が繰り広げられた。登壇者は、発足当初からシブサスに携わり、農や食とＳＤＧｓ、環境問題に造詣が深く、「共存学」を牽引されてきた古沢広祐氏、シブサスのリーダーにして、「渋谷のラジオ」「渋谷でサステナブル」のパーソナリティを務めるほか、プラスチックリサイクルに関する研究者でもある松嶋範行氏、「渋谷サステナブル・アワード」や「シブヤ若者気候変動会議」の事務局を務める佐藤龍彦氏、シブヤ若者気候変動会議に参加した本学学生の俵里奈氏の四人である。

今回の対話では、シブサスの活動内容や、令和四（二〇二二）年一一月に開催されたシブヤ若者気候変動会議の誕生経緯などが確認されるとともに、渋谷における持続可能な社会の形成を考えるための話題などを通して、環境問題への意識変革を喚起することの重要性も指摘されている。その詳細については、ぜひ本記録の内容をご一読頂ければ幸いである。

なお、本記録の掲載にあたっては、登壇者の皆様から加筆修正を頂くなど、研究会に加えての事務局からのお願いにご快諾頂いた。この場を借りて、深く御礼申し上げたい。

◇公開講座記録（所属・肩書は開催当時。敬称略）

第一回「しぶカフェ」（共生社会×渋谷カフェ）

「シブサス　―東京渋谷で進む環境にやさしいまちづくり―」

主　　催　國學院大學研究開発推進センター「〈ＳＤＧｓ〉と建学の精神」研究事業×渋谷学研究会

開催方法　國學院大學公式ＹｏｕＴｕｂｅチャンネル（動画アーカイブ）による配信

※配信ＵＲＬ　https://www.youtube.com/watch?v=uO6idFQraGA

日　　時　令和五（二〇二三）年一月二七日（金）より配信開始

登 壇 者　古沢広祐（國學院大學研究開発推進機構客員教授）

松嶋範行（シブヤサステナブル推進協議会リーダー）

佐藤龍彦（渋谷区環境政策部環境政策課主任）

俵　里奈（シブヤ若者気候変動会議メンバー・國學院大學学生）

コメント　秋野淳一（「しぶカフェ」事務局、國學院大學兼任講師・研究開発推進機構客員研究員）

※本記録の編集作業は、伊藤新之輔（研究開発推進機構ポスドク研究員）、髙橋亮一（同）が主に担当し、宮本誉士（研究開発推進機構教授）、秋野淳一、小林裕美子（研究開発推進機構臨時雇員）、山口順平（同）が協力した。

第一回「しぶカフェ」（共生社会×渋谷カフェ）
「シブサス　―東京渋谷で進む環境にやさしいまちづくり―」

古沢　広祐　松嶋　範行
佐藤　龍彦　俵　里奈
秋野　淳一

【古沢】皆さん、こんにちは。國學院大學の「しぶカフェ」という催し（公開講座）がこれから始まります。

「しぶカフェ」は、渋谷を舞台にしていますが、渋谷に限らず日本や世界全体に発信していくようなオンラインのサロンとして、いろいろな話題を発信できればと考えています。今回は、シブサス（シブヤサステナブル推進協議会）という、渋谷で行なわれているサステナブルな取り組みを中心に、環境にやさしいまちづくりをテーマに話し合ってみたいということで企画をしております。

まずは、シブサスをけん引されているリーダーの松嶋範行さんから、シブサスがどのように生まれてきて、どのようなことを実施しているのかについてお話をしていただきます。

《報告一》シブサスとは？

松嶋　範行

【松嶋】ただいまご紹介に預かりました松嶋範行と申します。シブヤサステナブル協議会のほかに九州の長崎市と佐世保市の地球温暖化防止活動推進センターなどでも活動しており、環境教育や啓発をなりわいとして生きているという希有な存在であるかと思います。

一五年ぐらい前からこのような仕事をしてきましたが、世の中が気候変動の時代になってきたものですから、私もあちこちでお話しする機会があります。今日は、渋谷を舞台にしたシブサスとは何かについてお話したいと思います。

日本と渋谷における二酸化炭素の排出量

東京渋谷にはいろいろな課題があります。二酸化炭素排出量に関する令和元（二〇一九）年度のデータ（「２０１９年度日本の部門別二酸化炭素排出量の割合」全国地球温暖化防止活動センター、https://www.jccca.org/）によりますと、日本から出ている二酸化炭素の年間総排出量は約一一億トンです。日本の総人口が約一億二四四七万人ですので、おおよそ一人あたり一トン排出しています。この排出量を部門別の割合から見ると、一番多いのは「産業部門」（三四・七％）です。日本は先進国ですから、

産業からの二酸化炭素の排出が最も多いのです。次に多いのが「運輸部門」（一八・六％）です。皆さんは車に乗りますか。東京の人はあまり車に乗らないようですが、飛行機や船といった乗り物からの排出もこれに当たります。それから次に多いのは「業務その他部門」（一七・四％）、つまりオフィスでの排出です。これに続いて「家庭部門」（一四・四％）は、皆さんが家で排出する二酸化炭素、電気やガスを使ったときに出てきたものがこれに当たります。日本の平均値は、おおよそこのような並びです。

一方で、渋谷区の二酸化炭素排出量の割合（E-KONZAL地域E-CO_2ライブラリー、https://www.e-konzal.co.jp/e-co2/）を見ますと、「業務」からの排出が何と五五％も占めています〔このほかの内訳は、「家庭」二一％、「運輸」一九％、「廃棄物処理」三％、「産業」二％〕。渋谷区民が約二三万人〔令和五〈二〇二三〉年一一月現在〕いるのに対して、おおよそその三倍に当たる人たち（約六〇万人）が、日中、このまちで生活、もしくは働いています。渋谷のまちは、渋谷の外から来る人によって二酸化炭素がたくさん出されているという構造を持っています。

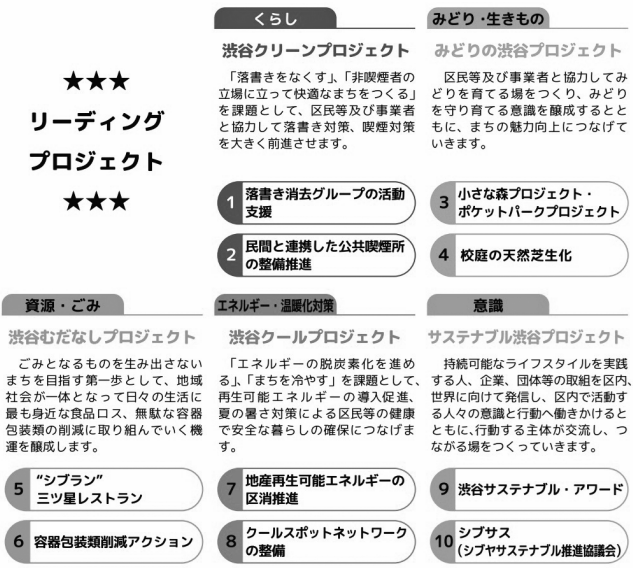
渋谷区環境基本計画

このような背景のなか、渋谷区は現状に手をこまねいていたわけではなく、平成三〇（二〇一八）年に三〇年ぶりに基本計画〔渋谷区『渋谷区環境基本計画２０１８』〕を策定しました〔講演収録後、令和五〈二〇二三〉年に改訂版が公表されたため、本記録の情報は『渋谷区環境基本計画２０２３』に依拠した〕。詳しくは渋谷区公式ホームページ上で閲覧することができますので、それをご覧いただきたいと思います（https://www.city.shibuya.tokyo.jp/kusei/shisaku/shibuyaku-kankyo-plan/kankyo-keikaku-2023.html）。

『渋谷区環境基本計画』には「くらし」「みどり・生きもの」「資源・ごみ」「エネルギー・温暖化対策」「意識」の

全部で五つの柱があります（**【図1】**）。

まず、「くらし」は、公害問題に関わる内容です。日本はずいぶん前にこの課題を乗り越えており、引き続き現状を維持していくことが「くらし」のなかの生活環境方針になります〔光化学スモッグの原因となるオキシダントの環境基準を令和九〈二〇二七〉年までに達成し、まちの美化に向けた落書き防止、清掃活動の推進、啓発活動を行なう課題を設けている〕。



【図 1】『渋谷区環境基本計画』における5つの柱とそのリーディングプロジェクト（『渋谷区環境基本計画2023（概要版）』5〜6頁）

次に、「みどり・生きもの」についてです。渋谷は緑が少ないと思われがちですが、実は結構あります。たとえば、渋谷区の真ん中には明治神宮や代々木公園といった大きな森があります。そのため、渋谷は比較的緑の豊かなまちであると数値上は意識されています〔令和四〈二〇二二〉年度の「渋谷区みどりの実態調査」によれば、渋谷区の緑被率は二二・八％、緑視率は二四・七％〕。緑をできる限り少しずつ増やしながら、現状維持していく目標〔令和九年〈二〇二七〉度までに区内の緑被率二三％以上、緑視率二五％以上に達成する数値目標〕を立てています。

そして、皆さんにとっては「資源・ごみ」「エネルギー・温暖化対策」に関する二つの軸が環境問題としてお馴染みではないでしょうか。「資源・ごみ」については、ごみを出さないことが、渋谷区を含めてどこの自治体

でもいわれております。しかし、渋谷のまちでは日中六〇万人近くが働いたり、遊んだり、勉強したりしており、たくさんの飲食店もあります。この軸には、飲食店に限らず、我々の生活の中から出てくるごみに関しても何とかしていこうということ〔「ごみとなるものを減らす」「適正に処理する」という方針のもと、食品ロスの削減や３Ｒ〈リデュース・リユース・リサイクル〉を推進し、令和九〈二〇二七〉年までに一人一日あたりの家庭ごみ量を三二三ｇ、事業系ごみ量を四〇四ｇまで削減する目標〕が書かれています。

続いて、「エネルギー・温暖化対策」です。渋谷は多くの商業施設や人が集まるところですから、エネルギーの消費量も高くなります。そうしたところをできる限り省エネしながらも、サービスを低下させないようにＣＯ$_2$対策をしていく必要があること〔「気候変動の緩和に向けて二酸化炭素排出量の少ない再生可能エネルギー、未利用エネルギーの活用を推し進めていく」という「渋谷クールプロジェクト」を掲げ、平成二五〈二〇一三〉年度の数値〈二酸化炭素排出量二四六万八千トン、エネルギー使用量二二、六〇一テラジュール〉を基準として、令和九〈二〇二七〉年までに温室効果ガス三九％、エネルギー使用量二一％を削減し、再生可能エネルギーを利用する区民の割合を令和四〈二〇二二〉年度の六・三％から増加させる目標〕をうたっております。

皆さんご存じのように、今までずっとこのエネルギーを使って暮らしてきたわけですから、既存のエネルギーを変えることは、なかなか一朝一夕にはできません。ここは少しずつ運動や啓発を行なって、いろいろな方々の理解を得ながら徐々に進んでいるところです。

そして、一番の軸になっているのが、「意識」の部分についてです。これまでどこの自治体や地域でも行なってきた内容なのですが、渋谷区としては、もう少しみんなが意識を変えて、その意識を行動変容につなげていくようなアクションが必要だということに気づいたわけです〔平成二八〈二〇一六〉年度の区民意識調査によると、「「日常生活における一人ひとりの行動が、環境に大きな影響を及ぼしている」ことを「大変そう思う」と考える区民の割合」が六三・三％、「地域における環境

保全のための活動（緑化、美化、リサイクル、環境保護等）に参加しており、今後も行ないたいと考える区民の割合」が一七・三％にのぼったとされる。この数値は、令和四〈二〇二二〉年度の区民意識調査によると、前者は六六・三％、後者は三一・〇％に達した〕。

行動を続けたり、意識を変えたりするためには、環境教育や学習を推進し、いろいろな自治体との協働を推し進めることが必要になります。たとえば、長野県飯田市にある「しぶやの森」では、二〇年ぐらい木が育っています〔渋谷区立中幡小学校の児童らが人工森林「中幡の森」を平成一二〈二〇〇〇〉年に創設。平成二一〈二〇〇九〉年に「しぶやの森」と改称後、渋谷区民に開放された〕。そのような土地、もしくはコミュニケーションを利用して、山の中に入って自然に触れたり、生活を見直したりする機会を得ていくところに、渋谷区は注力していきたいというわけです。

この「意識」において大事なことは、いろいろな仲間たちを見つけて、その仲間たちと一緒に考え、行動を起こしていくことだと思います。そこで、仲間集めの場や仲間たちが集まれる機会をつくろうとして令和元（二〇一九）年一〇月一六日に結成したのが、シブサス（シブヤサステナブル推進協議会）でした。

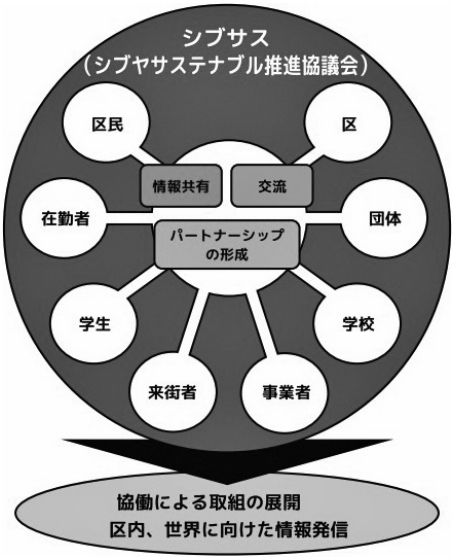
シブサス（シブヤサステナブル推進協議会）

【図1】のリーディングプロジェクト「意識」のところに「シブサス（シブヤサステナブル推進協議会）」と書かれています。これを一見すると、シブサスは、『渋谷区環境基本計画』に書かれているので何か大層な、すごい組織と思われるかもしれません。実際にはそのようなことはなく、緩やかな集まりになっています。

シブサスは、行政が中心になるのではなく、協働によって課題対応や環境への取り組みを展開しています。つまり、多様な人を集めて、その集まった人たちから、自由な発想で今までの渋谷を振り返り、未来の渋谷をつくっていく、あるいは未来の渋谷に向けて行動を起こしていく。そうした集まりにするのがシブサスの主なモットーといえます。

具体的には、【図2】にある「区民」や「在勤者」、「学生」など多様な構成要素が集まって、いろいろなアイデアを出して、アクションを起こしています。その事務局が渋谷区役所です。そもそも行政計画なのだから、【図2】のように列記していても、実際にはそれほどいないのではないかと思われる方もいらっしゃると思います。しかし、そのようなことはありません。

ここからは、実際にシブサスの具体的なメンバー（会員）を見ていきましょう。初めは六人のメンバーと渋谷区の長谷部健区長〔昭和四七〈一九七二〉年～現在。平成二七〈二〇一五〉年より現職〕からシブサスが始まりました。当初のメンバーから一部の方が入れ替わっていますが、今（令和五〈二〇二三〉年度現在）のシブサスのメンバーは全部で六人います。まずは、そのメンバーをご紹介します。



【図 2】　シブヤサステナブル推進協議会の構成図
（『渋谷区環境基本計画2023【概要版】』7頁）

シブサスのリーダーである私は、いろいろなアクションを手がけながら、一般社団法人渋谷未来デザイン〔多様性あふれる未来に向けた渋谷区をつくるため、渋谷に集う多様な人々のアイデアや才能を、領域を越えて収集し　オープンイノベーションにより社会的課題の解決策と可能性をデザインする産官学民連携組織〕におります。二人目は傍嶋賢さんで、渋谷の落書きを消していこう、無くしていこうというアクションをされている一般社団法人ＣＬＥＡＮ＆ＡＲＴの代表理事です。三人目は、國學院大學の古沢広祐先生です。私と傍嶋さん、古沢先生が「在勤者」「団体」の方になります。また、四

人目は渋谷区民の高橋賢次さんで、恵比寿の地域密着型ＷＥＢマガジン『恵比寿新聞』〔平成二一〈二〇〇九〉年創刊、https://ebisufan.com/〕の編集長です。それから、五人目の斎藤早央子さんは東京ガスネットワーク株式会社東京中支店地域広報当課長です。お二人が「事業者」の方になります。そして、六人目の小倉崇さんはＮＰＯ法人アーバンファーマーズクラブ渋谷区ふれあい植物センター指定管理者で「団体」の方になります。ここに区役所職員や長谷部健区長も入るため、シブサスのメンバーだけでも、少なくとも六つの構成要素（「在勤者」「区民」「事業者」「団体」「区」「区長」）が集まっていることになります。

次は、「学生」についてです。私はかつて実践女子大学で環境ファシリテーターを育成するための出前授業を行ない、二〇人の学生の皆さんに「ＳＤＧｓとは何か」という話と、「環境ファシリテーターを実践することは、実は難しくはなく、誰にでもできる」ということを、おおよそ二コマ〔一コマ一〇〇分のため、二〇〇分〕ぐらいの講義時間をかけて伝えてきました。ここでは学生の皆さんに参画いただいたことから、シブサスには「学生」が加わったわけです。

その次は、「学校」についてです。私が実施した「こども環境リモートインタビュー」では、パナソニック株式会社、株式会社セブン‐イレブン・ジャパン、ＢＥＡＭＳ〔株式会社ビームス〈株式会社ビームスホールディングス傘下の事業会社、旧・新光株式会社〉〕、Ａｄｉｄａｓ〔アディダス ジャパン株式会社〕、Ｇｏｌｄｗｉｎ〔株式会社ゴールドウイン〕、東京ガス株式会社のご協力をいただきました。これらの会社について、子供たちが班に分かれて事前に調べて質問をつくって、リモートで担当者の方とコミュニケーションを取りました。キャリア教育から環境教育に至るまで、いろいろなことが実現できました。このような形で「学校」が参加したわけです。

最後は、「来街者」についてです。シブヤ若者気候変動会議から説明します。佐藤さんのところでお話があると思いますが、昨年（令和四〈二〇二二〉年）、シブヤ若者気候変動会議のメンバーを渋谷区が公募したところ、二〇人

近くの応募があり、その中には今日登壇されている俵さんもいらっしゃいました。その二〇数人が四つのチームに分かれて、渋谷区へいろいろな提案や、渋谷の未来に関する具体的なアクションについての提言を行ないました。この会議の座談会には私も参加しておりましたが、下は小学校五年生（一〇歳頃）から上は三六歳まで、非常に幅広い方々に参加いただいて、いろいろな面白い意見を出してもらいました。ここに「来街者」がシブサスに加わるわけです。

【図2】に立ち戻ると、最初に「区民」や「在勤者」「団体」「区役所」「区長」そして「事業者」の皆さんが参加して、「学生」「学校」「来街者」がメンバーに加わりましたから、この図にあげた構成要素はすべて満たされました。残るは世界に向けた情報発信のみとなりますので、政策としては非常に優秀な流れを汲んでいるといえます。

このように、いろいろな方々がチャンスを捉えて、未来の渋谷について環境の側面からいろいろな提言を行ない、様々な世代の意見を取り入れながら、その中で具体的にできること、やりたいことをうまく整えていく。そのような形でお手伝いをさせていただいているのがシブサスです。行政のプロジェクトとしてはなかなか珍しい存在ではないかと思います。

なお、シブサスの冠があるラジオ番組が「渋谷のラジオ」にあります。「渋谷でサステナブル」という番組で、毎週木曜日の午前一一時一〇分から約一時間、生放送しています〔令和五〈二〇二三〉年一二月時点の番組情報、https://note.com/shiburadi/m/m5c130b1eeb90〕。私がパーソナリティを務めておりますので、出演されたい方や、何かお話されたい方はぜひご連絡いただければ幸いです。

以上が、シブサスのご紹介となります。

《報告二》サステナブルなシブヤ in 日本・世界

古沢　広祐

【古沢】松嶋さん、どうもありがとうございました。シブサスというキーワードをもとに、多面的な展開をしている様子がわかりました。私のほうでは、シブサスの「サス」、サステナブルについて、このキーワードがどのように生み出されたのかといったところから導入的なお話をしたいと思います。

サステナブルとは何か

「サステナブルなシブヤ」とは一体どのような動きなのでしょうか。シブサスが目指すローカルからグローバルまでの話につなげていく前に、そもそもサステナブルとは何かという点から説明します。

最近、皆さんは「サステナブル〔Sustainable〕」という言葉をよく耳にするかと思います。これは、英語の「サステイン〔Sustain〕」、「これからもずっとそのまま続いていく、維持あるいは持続可能な」という意味から生まれた言葉です。

今、世界全体は特に環境問題について深刻な事態を抱えていて、持続可能な未来社会が大きな危機に直面しています。これを何とか解決して持続可能なも

のとするために、長年にわたる国際的な動きを経て、「ＳＤＧｓ」という言葉は生まれました。「ＳＤＧｓ〔Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標〕」は、国連が平成二七（二〇一五）年九月二五日に定め、令和一二（二〇三〇）年に向けて日本社会や世界、そしていわゆる貧困問題や私たちの暮らし方、住まい、地球環境などの様々な問題を持続可能なものにしていこうとして、具体的な目標（一七の大きな目標と一六九の細かい課題）を定めたものです。そういう流れの中で、渋谷でもサステナブルを目指す動きが出てきているわけです。ですが、もっと先を行って、渋谷だからこそできるサステナブルを世界に発信していこうということで、シブサスのような動きがあるわけです。

サステナブルをめぐる世界の動き

私たちの生きている世界では、コロナのパンデミックをはじめ、特に今日のテーマにもなっている気候変動については待ったなしの状況に陥るなど、なかなか深刻な問題を抱えています。二〇世紀から二一世紀にかけては、エネルギーの消費量や人口が爆発的に増大して、このままいくと二一世紀中に地球環境が限界を迎えることになります。

気候変動のみならず、海洋汚染の問題やマイクロプラスチック、生き物たちの絶滅など、世界全体がいろいろな問題を抱えて大変な危機下にあります。やはり持続可能な社会をつくっていくためには、いろいろな形の取り組みが期待されています。

細かい話は**【図3】**に譲りますが、世界全体がサステナブルに取り組む大きなきっかけになったのは、平成四（一九九二）年にブラジルのリオデジャネイロで開かれた地球サミット〔環境と開発に関する国連会議〕でした。地球サミットの時、日本の市民団体が、国任せではサステナブルは実現できないと見てブラジルに集まり、地球市民として連帯していく動きを起こしました。

【図 3】 激変してきた世界の動き（古沢広祐作成）

こうして、日本を含めた各国は平成四（一九九二）年に「気候変動に関する国際連合枠組条約」や「生物の多様性に関する条約」といった国際条約を結び、環境レジーム〔一国では解決することが困難な課題について、関係国が条約などをもって協働する国際的な枠組〕をスタートさせました。

この動きの原点となったのは、地球サミットからさらに二〇年前の昭和四七（一九七二）年にスウェーデンのストックホルムで開催された国連人間環境会議でした。国連人間環境会議は、公害問題がローカルな問題ではなく、グローバルな問題であると見直して、世界全体がサステナブルに向かうための具体的な取り組みを始める発端になりました。ここに、地球と私たちの暮らしについて考えようとする動きも起き、ミクロコスモスとマクロコスモス、あるいは「身土不二」のように、自分の体と地球、自然は一緒で切り離せないのだというサステナブルな思想が生まれたわけです。

アースデイ

その流れからいうと、アースデイ〔Earth day：地球の日〕の取り

組みは、一九七〇年代の環境問題から始まり、実は今も行なわれています。**【写真1】**は渋谷の代々木公園〔渋谷区代々木神園町・神南二丁目〕で毎年四月に行なわれているアースデイの光景です。アースデイは、まだ一般には周知されていませんが、かなり盛り上がっています。

【写真 1】　代々木公園のアースデイ
（平成27〈2015〉年4月、古沢広祐提供）

アースデイは、昭和四五（一九七〇）年、公害問題が深刻化した時に、アメリカの大学生たちが「母の日とか、父の日とかいろいろな記念の日があるなら、私たちの地球（マザーアース）、母なる大地、地球のことを考える日が必要だ」と声を上げたことを受けて、当時のニューヨーク市長〔ジョン・リンゼイ John Vliet Lindsay. 大正一〇〈一九二一〉～平成一二〈二〇〇〇〉年〕が、そうした記念の日をつくってきちんと取り組もうとなって、ニューヨーク市のユニオン・スクエア・パーク〔Union Square Park〕に初めて歩行者天国を設けたところから始まりました。環境問題を契機に自動車を締め出して、人々に道路を開放しようとするアイデアは学生から出てきたのです。この動きがパリや東京など世界中に広がり、定着していきました。

これらの動きを受けて、アメリカは昭和四五（一九七〇）年七月九日に環境保護庁〔Environmental Protection Agency：EPA〕を設置し、これに続いて日本も昭和四六（一九七一）年七月一日に環境庁〔現・環境省〕を設置しました。これらは環境保護政策の最初の火つけ役となり、地球サミット以降、アースデイなどのエコロジカルな催しへと広がりました。代々木公園は、こうした

集まりの舞台として毎年使われていますから、渋谷はグローバルな動きとローカルな動きとが結びついている場所といえます。

ローカルＳＤＧｓをめざして

ただ、実際のところ世界では、アメリカ同時多発テロ事件〔平成一三〈二〇〇一〉年九月一一日〕やリーマン・ブラザーズの金融破綻による世界的な金融危機〔平成二〇〈二〇〇八〉年九月一五日〕、三・一一の東日本大震災〔平成二三〈二〇一一〉年三月一一日〕が起き、新型コロナウイルス感染症のパンデミック〔令和二〈二〇二〇〉年～現在〕に曝され、世界平和の問題も深刻な状態〔ロシアによるウクライナ侵攻、令和四〈二〇二二〉年二月～現在、イスラエル・ハマス戦争、令和五〈二〇二三〉年一〇月～現在〕に陥るなど、私たちの足元は大変揺らいでいます。だからこそローカルな中、あるいはグローバルな中で、持続可能な社会をつくっていこうとするＳＤＧｓが注目されてきているわけです。

問題は、この動きをどのように定着させるかです。日本の場合、コロナ禍を経験したことにより、あまり一極集中するのではなく、ローカルなところと、地域全体がもっとつながっていくことで、都市と農山村がつながっていこうという動きが見直されています。

先ほど松嶋さんのお話にもありましたが、渋谷のみならず他の地域ともつながりながら、持続可能な地域社会、日本からアジア圏、そして世界全体へとつながっていくようなサステナブルなビジョンをつくろうとしています。このあたりは、環境省の第五次環境基本計画〔平成三〇〈二〇一八〉年四月一七日閣議決定〕において、地域が循環して、共に生き合う地域循環共生圏〔各地域が地域資源を生かして、自立・分散型の社会を形成するとともに、相互補完をもって支え合うような社会モデル〕をうたい、ＳＤＧｓをローカルに展開する時のキーワードになっています。これを「ローカルＳＤＧｓ」

といいます。

そうした意味では、日本は非常にローカルで、バラエティに富んだ、自然豊かな国です〔環境省自然環境局編『人と自然の共生を目指して 改訂版』〈環境省自然環境局、令和二（二〇二〇）年〉によれば、日本の国土三八万㎢の約八〇％が森林と農用地で占められている〕。都市の部分では近代化が進む中にあっても、そこには近代的な都市とともにローカルな文化や伝統的なもの、そして自然の豊かさが凝集しています。たとえば、お雑煮という郷土食は、地域によって入れる具材が異なりますから、生物多様性や自然の豊かさを反映した食べ物です。日本は今、経済的になかなか厳しい状況にありますけれども、文化の面、あるいは自然環境の面では、非常に豊かなキャパシティといいますか、潜在的な可能性を持っています。ですから、そこにもっと注目してはどうでしょうか。

國學院大學では、地域連携や国際連携をいろいろな形で発信するなかで、観光文化の発信拠点の一つになることを目指して新しい学部（観光まちづくり学部）を令和四（二〇二二）年に新設しました。ローカルなものからグローバルなものまである中で、日本こそが様々な可能性を秘めていると捉え、ホットスポットとしてのダイバーシティ（多様性）を日本から見直そうとする動きが出てきています。

そして、本日のテーマになっているシブサスにおいても、「シブヤでもサステナブル」というだけではなく、「シブヤだからこそサステナブル」という取り組みが非常に活発になっています。ですから、國學院大學としても、このシブサスの動きと共に手を携えて、渋谷から持続可能な地域社会や地球社会に向けての活動につなげていきたいと考え、そうした流れの中に本日のお話（「しぶカフェ」）があるわけです。

《報告三》シブヤ若者気候変動会議の挑戦

佐藤　龍彦
俵　里奈

【古沢】では、「シブヤだからこそサステナブル」とはどのようなサステナブルなのでしょうか。ここからはその具体的な内容に入りたいと思います。そこで、シブヤ若者気候変動会議の事務局として関わってこられた佐藤さんと、メンバーとして活動に参加された俵さんにご登場いただきます。まずは佐藤さんにお話をいただいてから、俵さんにいろいろと発信していただきます。

【佐藤】渋谷区環境政策課の佐藤と申します。このパートでは、俵さんの活動になるべく焦点を当てながら進めたいと思います。まずはシブヤ若者気候変動会議が始まったいきさつから説明させていただきます。

シブヤ若者気候変動会議の設置経緯

環境問題にはいろいろな要素がありますが、昨今は気候変動や地球温暖化の問題に焦点が当てられています。これらが深刻な問題とみなされている中で、国は令和二（二〇二〇）年一〇月二六日に菅義偉首相が、令和三二（二〇五〇）年には二酸化炭素を実質ゼロにする目標〔二〇五〇年カーボンニュートラルに伴うグリーン成長戦略〕を掲

げて、今まさに邁進しているところですが、その時（令和三二〈二〇五〇〉年）に社会を担っているのは今の若者になります。

そうした中で、長谷部健・渋谷区長は令和三（二〇二一）年度の渋谷区議会・第三回定例議会（九月一三日～一〇月一三日）において「一〇代から三〇代の方を想定した「気候シブヤ民会議」を発足させて、議論していくことを検討してまいります」と発言されました（「渋谷区議会議事録」令和三年度第三回定例議会、九月一三日）。シブヤ若者気候変動会議が生まれる背景には、まず渋谷区のトップがこういう発言をされたということがありました。

当時私は、渋谷区環境政策課の業務の中で学生団体や渋谷区で活動している若者のＮＰＯ団体と関わる機会がありましたので、この区長の発言と私の活動自体にリンクした点を見出しました。

また、令和四（二〇二二）年度は、令和五（二〇二三）年度の改訂に向けた『渋谷区環境基本計画』の中間見直しの年に当たり、それを行なう中で、二酸化炭素排出量のゼロ化などに焦点が当てられていることから、やはり若者の意見をしっかり取り入れていく必要がありました（『渋谷区環境基本計画２０２３』六二頁）。こうした経緯のなかで生まれたのがシブヤ若者気候変動会議です。

シブヤ若者気候変動会議の立ち上げにあたり、まずは若者団体、学生団体、ＮＰＯ団体、Ｓ-ＳＡＰ〔渋谷区内に拠点を置く企業や大学等と区が協働して、地域の社会的課題を解決していくための公民連携制度、https://www.city.shibuya.tokyo.jp/kusei/ssap/about-ssap/ssap_kyotei.html〕提携のある大学に会議への協力を呼びかけて、ここから快諾をいただきました。あとは実際に区民に公募をかけて、今年（令和四〈二〇二二〉年）度は二〇人のメンバーで会議を立ち上げることができました。

シブヤ若者気候変動会議の運営について

シブヤ若者気候変動会議の運営としては、月一から二回の定例会を開くほか、定例会と定例会の間にテーマを投げかけて、グループに分かれて議論し、次の定例会でそれを発表する方法で行なってきました。そうした運営を重ねたうえで、令和四（二〇二二）年一一月一三日には、皆さんの日ごろの研究結果や考えた内容を全国に向けて発信する「渋谷環境シンポジウム２０２２」に参加し、シブヤ若者気候変動会議のメンバーが「渋谷から環境を変えていきたい」という思いを広く発信する機会となりました。

現状では、いろいろな提案をして終わるのではなく、その提案をどのようにして形にするのかを会議のメンバーでまた考えています。「渋谷環境シンポジウム２０２２」での発信という大きな節目を迎え、今はまた少しずつ動いていこうとする過程にいます。このようなシブヤ若者気候変動の活動を一年間続けてきました。

メンバーの募集や協力いただける団体への最初の声かけ、会の運営などは、上司の命令を受けながらも、ほとんど私一人でさせていただきました。会議の運営を業務委託したのではないかと思われる方もいますが、私のほうですべて行ないましたので、この会議の運営にはかなり力を割いたと思っています。また、私が少し関わることによって若者とのいろいろなコミュニケーションや、タテ・ヨコ・ナナメのつながりができたことは本当によかったとも思っています。

私からの報告は以上とさせていただき、俵さんにバトンをつなぎます。ここからは、俵さんが大学の中でどのような活動をされて、どのような経緯からシブヤ若者気候変動会議に参加されたのかも含めて、話していただければと思います。

気候変動問題への関心とフライデーズ・フォー・フューチャー

【俵】國學院大学文学部日本文学科の俵里奈と申します。渋谷に関わりのある人たちの中で気候変動のアクションをみんなで考えていくというこの会議には私も参加しております。今日は、これまでの私の取り組みを中心にお話をしたいと思います。

私は今、気候変動に大きな危機感を持っています。そのきっかけとなったのが、高校生の時にウミガメの鼻にストローが刺さったショッキングな写真を目にした時でした。自分たちの生活の中で出ているごみが、このように悪影響を与えていることに衝撃を覚え、とてもつらく感じました。

それから、大学受験が終わり大学生になる直前に、デイビッド・ウォレス・ウェルズ著、藤井留美訳『地球に住めなくなる日―「気候崩壊」の避けられない真実―』(NHK出版、令和二〈二〇二〇〉年)を読みました。ここでは、科学的な知見に基づいて、たとえば、気温が四度上昇すると、東京や大阪といった大都市は浸水してしまうという未来を予測し、それに警鐘を鳴らしています。そのような中、世界共通の気温上昇を一・五度までに抑えるという数値目標〔『一・五℃の地球温暖化：気候変動の脅威への世界的な対応の強化、持続可能な開発及び貧困撲滅への努力の文脈における、工業化以前の水準から一・五℃の地球温暖化による影響及び関連する地球全体での温室効果ガス(GHG)排出経路に関するIPCC特別報告書』、気候変動に関する政府間パネル〈IPCC〉が平成三〇〈二〇一八〉年一〇月八日に公表〕があるのですが、すでに一・一度まで気温上昇が進んでいて、「気候崩壊」待ったなしというところでした。今まで学校では教わってこなかった事実を知り、

【写真 2（左側）】　東京・新宿駅前における啓発活動
（令和 3〈2021〉年3月19日、俵里奈提供）

【写真 3（右側）】　国会議事堂前におけるスタンディング
（令和 3〈2021〉年6月10日、俵里奈提供）

これは何とかしなくてはならないと思い、居ても立ってもいられなくなりました。これが一つの大きな動機づけでした。

ここで私が始めた活動は、フライデーズ・フォー・フューチャー〔Fridays For Future〕という、若者が中心となって「気候変動対策をもっと進めましょう」と社会に訴える市民運動への参加でした。その中で、私は仲間とともに新宿駅前や国会議事堂前で脱炭素に関するスタンディングや啓発をしたり、国には「温室効果ガスの削減目標を何パーセントにしてください」と訴えたりするなど、具体的な指標とともに発信をしてきました（**【写真2】【写真3】**）。また、大学などの学校に赴き、気候変動に関わる啓発活動などを行なう学校講演という形では、同世代に発信をする場を企画、実行してきたほか、私の地元の埼玉県新座市には、令和三二（二〇五〇）年までに二酸化炭素排出量のゼロ化を求める陳情書を令和四（二〇二二）年二月一四日に提出して〔「ゼロカーボン宣言に関する陳情書」は、同年三月二五日に本会議で採択され、五月二〇日の「新座市ゼロカーボンシティ宣言」へつながった。https://zeroemi.org/nizacity-petition-030822022/〕、自分の地域にアプローチをした活動もしてきました。

エコアクションの提案とその発信

そして、シブヤ若者気候変動会議に参加し、渋谷区民の方々をエコアクションにどのように巻き込むかを考えて、幅広い世代で対話をしながら発信する場にも関わらせていただきました。

この会議では各グループに分かれて、渋谷区民をターゲットにどのようなアクションを起こすことができるかを発信するための案を考えました。それとともに、私のグループでは、渋谷区が定期的に開催している「ふるさと渋谷フェスティバル」〔一一月の第一土・日曜の二日間に代々木公園で開催する渋谷区最大規模のイベント。https://www.shibuya-fes.online/〕にて、たとえば、ヴィーガン〔ベジタリアン〈菜食主義者〉のうち、畜肉・鶏肉・魚介類などの肉類に加え、卵や乳・チーズ・ラードなど動物由来の食品を一切とらない人、完全菜食主義者〕を体験できるブースや、電気自動車、省エネ機器といったものに身近に触れられるブースを設けるなどのエコアクション案を考え、それをＳＮＳで発信しました。

身近なところから気候変動対策

ところで、気候変動は最近頻繁にニュースでも取り上げられることが本当に多くなってきました。ただ、何か行動を起こさなければという危機意識はあっても、「やはり面倒だ」「一人で取り組んだところで一体何になるのだろうか」と感じる人も多いのではないかと思います。

実は、身近なところから楽しく、そして経済的にもメリットのあるアクションを起こすことはできます。たとえば、最近はいろいろなお店でマイボトルに水を無料で入れられる場所〔無料給水スポット〕が増えました。國學院大學でもカフェラウンジ若木が丘にマイボトル、マイタンブラーを持って行けば、飲み物を割引料金で購入することができます。

また、肉食を避けるヴィーガンという食事スタイルは、最近のホットワードだと思います。畜産業は、世界総排出量の約一四％を占めるほどの温室効果ガスを出しているといわれ、この量は全世界の運輸関連産業（自動車など）の排出量に匹敵します。私は渋谷区内のお店で大豆ミートを使った唐揚げを食べたことがありますが、とてもヘルシーでおいしいものでした。渋谷にもこのようなお店がたくさんあるので、ぜひ行ってみてください。

このように、私自身の未来のみならず、自分より下の世代の未来も脅かされている中では、モノを大量消費しない循環型社会をみんなでつくる機運をもっと高められればと思います。今、シェアという考え方が広まってきていて、たとえば、渋谷には電動キックボードをシェアして使える場や、駅に設置された傘の無料貸し出しブースなど、シェアリングをもっと後押ししできれば、循環型社会をつくることができるのではないかと考えています。

それからもう一つ、「カジュアルに気候変動の話ができる空気感」についてです。気候変動や社会問題といったテーマは、なかなか身近な話題にしにくい部分はあると思います。私自身も友達とこうした話をしたくても、切り出し方などが難しいと思うことがあります。しかし、話をしていく中で、相手も実は気候変動に関心を持っていて、身近なところから気候変動対策に取り組むこともでき、いろいろな行動の輪が広がっていくきっかけになるのではないでしょうか。このような空気感を身近なところからつくっていければと思います。

今日は、以上のような内容をお話してきましたが、國學院大學にもこうした学生がいることをお伝えできたかと思います。

【佐藤】素晴らしいプレゼンテーションをありがとうございました。特に私が注目したのは、「カジュアルに気候変動の話ができる空気感」についてです。そうした話題をカジュアルなものにしていくことはとても重要です。国会前まで行って脱炭素などを訴えかける活動をされてきた俵さんは「すごい」と思います。ですが、考え方を変えると、こ

の俵さんが「すごくない」社会になれば、気候変動を取り巻く状況も変わっていくのではないか。あるいは、温暖化の加速が鈍化するのではないかと思っています。「明日どこに行く?」というような気軽さで、自然に気候変動の話ができるような社会をつくっていければと思いますし、俵さんのような方がますます増えて、それが普通になる社会を迎えられるように、行政としてもいろいろな支援や、松嶋さんが紹介された「意識」の部分に焦点を当てた政策、イベントを発信していかなければならないと改めて考えさせられました。

ただ、やはり今の段階では、まだ俵さんは「すごい」わけです。「こんなには動けない」と正直思ってしまいます。ですから、ここまで活動できるようになったきっかけは、先ほどのウミガメの話のほかにもあるのでしょうか。行動の源泉があっても、それに基づいて動き続けることはとても難しいと思います。それを続けられるのは一体なぜなのでしょうか。行動に移すことのできない方や持続できない方へのアドバイスも含めてお願いします。

【俵】 ありがとうございます。私の行動のきっかけは、『地球に住めなくなる日』やウミガメの写真でした。ここから気候変動に危機感を持った時に、フライデーズ・フォー・フューチャーの活動がたまたまメディアに載っていて、「ああ、同世代が同じような気持ちを持って発信をしているんだ」と知り、自分もそこに関わりたいと思って、その関連のコミュニティに入ったところも一つ大きいのではないかと思います。スタンディングのアクションは一人では難しいところでしたが、同じ問題意識を持つ友達が一緒にやっている中で、自分にもできるという強みがありました。

市民運動というと、日本では歴史的に過激だというイメージを持つ方もいらっしゃるかと思いますが、海外ではかなりポジティブで非常に大きなムーブメントになっています。日本でもイデオロギーなどは関係なく、素朴に何かの問題を自分事に捉えて活動している団体も相当数あります。そうした市民運動もあるので、みんなでもっと運動の輪を広げていくためにも、一緒に参加してくれる人が増えたらいいと思います。

《座談会》

古沢　広祐　松嶋　範行
佐藤　龍彦　俵　里奈

【古沢】お二人ともありがとうございました。ここからは松嶋さんにも入っていただいて、四人の世代を超えた座談形式で進めたいと思います。

先ほどから話題になっている「渋谷環境シンポジウム２０２２」〔主催：渋谷区、開催日時：令和四〈二〇二二〉年一一月一三日〈日〉一三時半～一五時、第一部：渋谷サステナブル・アワード授賞式、第二部：シブヤ若者気候変動会議、ＳＯＣＩＡＬ　ＩＮ　ＮＯＶＡＴＯＮ　ＳＨＩＢＵＹＡ オフィシャルチャンネル２にて公開配信〕の第二部「シブヤ若者気候変動会議」総会には、いくつか印象深いところがありました〔「その総会として、クリーンな未来を願い、実現するためのメッセージを発信しました」https://www.city.shibuya.tokyo.jp/kankyo/kankyo/kankyo-event/kankyo_sympo2022.html〕。当日は佐藤さんの司会進行のもと、俵さんをはじめ二〇人のメンバーが参加する中で、小学生から社会人までのいろいろな世代の方々が発表し、なかなかの盛り上がりを見せていました。実は、このシンポジウムを舞台裏でサポートされていたのが松嶋さんでした。あの時、「シブヤ若者気候変動会議」総会に参加したグループはいくつあって、それぞれがどのような取り組みをしていましたか。

【松嶋】参加したグループは全部で四つ〔フューチャーネーチャー、渋谷Ｔｗｏ、ＳＢＹ０５、アサイーボウル〕でした。四つのグループは、基本的には今の渋谷区にとって重要な課題を中心に議論しました〔前掲のグループ順に、「イベント企画を

通したエコアクション促進案」「渋谷区をＥｃｏで塗りつぶせ―ハチペイで広がる脱炭素―」「デジタル都市で行う『ゴミ削チャレンジ』」「エアコンを買い替えて世界を救おう！」を提案〕。一番面白かったのは、渋谷で今行なっている具体的なイベントや政策に環境アクションをかけ合わせていくという、非常に現実性の高い提案があったことでした。

【古沢】この時はまさに晴れの舞台といいますか、発表会的な感じでいろいろな方を巻き込んでいったようですが、準備はどうでしたか。まず俵さんにお聞きしますが、当時を振り返って何が一番印象に残っていますか。

【俵】私のグループ〔フューチャーネーチャー〕では、「ふるさと渋谷フェスティバル」を活かしたエコアクション案〔「イベント企画を通したエコアクション促進案」〕を考えました。この案は、グループメンバーである渋谷区在住の小学生二人〔田中悠氏、宮川直樹氏〕が発案したもので、渋谷区に住んでいるからこそ出てきた視点を活用したものでした。私には弟がいますが、小学生ほどの下の世代と関わる時間はあまりないので、普段関わりのない人たちと気候変動をテーマに話し合えたことがとても刺激的で楽しかったです。

【古沢】佐藤さん。本当は我々の世代に気候変動の責任があって、その責任を果たさなければなりません。そうでないと、そのツケを次の世代に回してしまうから。だけど、若い人たちは「もう待っていられない」「自分たちでいろいろなことを起こすんだ」ということでないと、なかなか先を見通せないわけです。俵さんがお話されたように、市民と行政が環境問題について話し合う「気候市民会議」が渋谷区以外の日本各地でも行なわれ、世界でも欧州を中心に開催されています。今回、渋谷区では長谷部区長の議会での発言を契機に、若者にかなり焦点を当てたものになっていますが、準備はどうでしたか。メンバーにはどのような方がいましたか。

【佐藤】シブヤ若者気候変動会議のメンバーは二〇人でしたが、実は区民が八人いて、ほかの一二人は区民ではなく、在勤あるいは在学という形で渋谷区に関わっている方でした。もちろん、彼らが渋谷区にもつイメージや思っている

ことは、毎日のように渋谷に来ていますから、渋谷区と全く関係ない人よりはあるわけです。そうした自分のイメージを区民の方とも共有しながら昇華させていくような会議だったと思います。

運営については、ある種ゼロベースで形にした部分があります。最初は「一般社団法人日本若者協議会」という超党派の団体〔平成二七〈二〇一五〉年一一月に富樫泰良らが設立〕が、「日本版気候若者会議」という会議をつくって、国に提案などをしていました。会議運営の方法については、そこからアドバイスをもらって、なるべくそれをシブヤ若者気候変動会議の運営に適用しました。

ただ、やはり二〇人いると、意見の対立とまではいきませんが、「あの人は全然関わってくれないな」というように、中には怠けてしまう方も出てきます。そうしたところを私がどう調整するかということもあったり、松嶋さんがファシリテーターとしてうまくまとめてくれたりしました。この点も今となっては醍醐味であったかと思います。

メンバーの若者は意識が高いだけではなく、一人一人の能力も非常に高いので、もはや私が何かをいえるような立場ではありませんでしたが、四つのグループに分かれて提案をまとめていくなかで、しっかりデータを確認し、示してくださいました。わかりやすいものでは「家電の買い替えをしようよ」という提案〔「エアコンを買い替えて世界を救おう！」〕がありました。たとえば、一〇年前の家電を使っている場合、それは今のものと比べて環境負荷が高いので、古い家電を新しく買い替えることによって、地球環境が少しは良くなるのではないか。買い替えた暁には、渋谷区は補助金を出すという提案でした。

会議では、ただ提案するだけではなく、「この家電はこういう理由でCO_2を一番出していて、一家庭当たり年間何キロ出しているから、環境への影響が非常に大きい。だから、ここを各家庭が変えれば非常に高いインパクトが出るのではないか」といったところまでデータを蓄積し、わかりやすく整理して発表してくださいました。そして、こう

したプロセスを経てまとめられた発表が会議全体で共有されたことは、会議のメンバーにとっても、本当にいい機会になったのではないか。そのような感じで、若者といろいろなコミュニケーションが取れて良かったと思います。

【古沢】シブヤ若者気候変動会議は、渋谷区ではかなり注目されているようですが、先ほど俵さんは地元の新座市のほか、所沢市でも似たような気候市民会議をやっているとお話されました。それらと渋谷の会議とを比べて、渋谷の特徴のようなものはありましたか。

【俵】所沢市には、気候市民会議〔「マチごとゼロカーボン市民会議」〕があります。私はそこのコアメンバーではありませんが、最初のプレ設立総会では、若者としての思いを伝えるスピーチをさせていただきました。私が参加した気候市民会議の場にはかなりシニア層が多く、所沢市でも多かったと記憶しています。これに対して、シブヤ若者気候変動会議は、若者というところで、同世代と対話するやりやすさもあって、アクションをいろいろ考えることができて楽しかったです。

【古沢】松嶋さんはいろいろな現場を見てこられたかと思いますが、今回のシブヤ若者気候変動会議の「渋谷らしい」ところはどのあたりにありましたか。渋谷はダイバーシティを掲げて、ＬＧＢＴ〔女性同性愛者〈Lesbian〉、男性同性愛者〈Gay〉、両性愛者〈Bisexual〉、トランスジェンダー〈Transgender〉の頭文字をとって、性的指向と性自認の概念を基にした性的少数者の総称〕や渋谷発のベンチャーなどのいろいろな動きを文化発信していますが、今回の「渋谷環境シンポジウム２０２２」のつながりの中ではいかがでしたか。

【松嶋】一番大きなところは、佐藤さんに代表される区役所の担当者が若者であったことでした。参加者の視点に立てるということが、参加した俵さんも含めて、ほかの若い人たちも親しみやすかったのではないかと思います。

私もシニア層に含まれるのでしょうが、シニア層の方が多いと、どうしても成功するかどうかなど、過去の経験値

に基づく実現可能性を前提に考えてしまいます。ただ、今ある気候変動は、過去の延長だけで解決できるような課題ではありません。新しいことを切り開いて、考えなければなりません。ヴィーガンといったことに柔軟に対応できる、もしくはそれらを受け入れられるようなキャパシティがないと成功しないし、「いっても結局形にならないじゃん」と若い人たちの気持ちも萎えてしまいます。そういう意味では、今回の試みは非常に成功したのではないかと思います。区役所だけではなく、特に若い人たちがかなり真剣に、過去の延長ではなく、大人の社会のこと（区のイベントや政策など）も取り入れながら、うまくコネクトの仕方を見出したことが、非常に効果的で特徴的でもあったかと思います。

【古沢】松嶋さんは、ほかに渋谷区内の小学校や実践女子大学の学生と連携したり、長崎県佐世保市の取り組みにも関わってこられたりしたわけですが、今後の動きや期待なども含め、どのように感じていますか。

【松嶋】気候変動に対する事業者のメンタリティやアクティビティは、渋谷のほうが圧倒的に高いですね。地方に行くと、まだたくさん自然が残っていて、それを日常に感じる地方の事業者の人たちは、残念ながら気候変動にはピンときていません。

渋谷の気候はよく変わるし、暑いし、人も多い。そうした意味では、渋谷は発信力が強いので、先に進めるのではないでしょうか。ですから、シブヤ若者気候変動会議は、新たに若い人を「第二期生」として集めてもいいと思います。俵さんを含めた、今活動している若い人たち（第一期生）が今度はファシリテーションしながら、さらに上に上げていくような面白い政策提案や、行動変容につながるスパイラルをつくっていけたらいいのではないかと思います。

【古沢】渋谷は「渋谷のラジオ」をはじめとしていろいろな情報発信をしています。「渋谷のラジオ」の公式サイト〔https://shiburadi.com/〕のアーカイブでは、渋谷のいろいろなことを聞くことができます。俵さんもこの前、ラジオに出演さ

れていましたよね。

【俵】はい。シブヤ若者気候変動会議のメンバーとして「渋谷の星」という番組〔令和四〈二〇二二〉年一二月二〇日の放送回、https://note.com/shiburadi/n/nd1a067b72c3c、一二月二七日の放送回、https://note.com/shiburadi/n/n95dbdb3f7af8〕に出演させていただきました。

【古沢】「渋谷環境シンポジウム２０２２」の関係者はこのラジオに参加しているのでしょうか。

【松嶋】はい。シブヤ若者気候変動会議のメンバーが「渋谷のラジオ」の「渋谷でサステナブル」に二人ほど、四〇分バッチリ出演しています〔宮川直樹氏・令和四〈二〇二二〉年八月一七日の放送回、https://note.com/shiburadi/n/n7502a408f098、南直冴氏・令和四〈二〇二二〉年八月三一日の放送回、https://note.com/shiburadi/n/n93ae7350ab55〕。先ほどもいいましたように、若い人たちはいいたいこと、やりたいことがあれば、ぜひ気軽に声をかけていただければ、うまい具合に料理しながら「渋谷のラジオ」で喋ることができます。

【古沢】いろいろな取り組みが起きていますが、やはり渋谷区には、まだまだ気づかれずに「隠れている宝物」があります。たしか、渋谷区には日本で一番小さな植物園、渋谷区ふれあい植物センター〔東二丁目二五番地三七号〕があって、今（令和五〈二〇二三〉年一月現在）は改装中ですが、間もなくオープンするのでしたね。

【佐藤】そうですね。渋谷区ふれあい植物センターは、令和五（二〇二三）年七月のリニューアルオープンに向けた工事中で、今は指定管理者を決めるという段階にあります〔渋谷区ふれあい植物センターは令和五〈二〇二三〉年七月二九日にリニューアルオープンした。https://sbgf.jp/、https://www.city.shibuya.tokyo.jp/shisetsu/bunka-shisetsu/fureai.html〕。古沢先生がおっしゃったとおり、日本で一番小さい植物園が渋谷にあるということ、「みどり」に関わる情報発信が渋谷からなされることも、植物センター自体は新しくはないが今まで気づいていなかった価値として、区民や来街者の皆さま

に周知していければと我々は思っています。

それから、もう一つご紹介したいのが「ハチペイ」です。ハチペイとは、「忠犬ハチ公」と決済アプリを表す「Pay」を合わせて名づけたもので、渋谷区内限定で、店舗やコミュニティ、イベントで利用ができるスマートフォン限定のキャッシュレス決済アプリを指します。このハチペイと一緒に活用できるものとして、「まちのコイン」〔面白法人カヤックが提供、渋谷区を含めた二五の地域〈導入終了地域を含む〉で導入されている〕の「ハチポ」があります。これは、渋谷区のお店・団体・人をつなげるアプリで、ハチポをもらったり、あげたりしながら、様々な地域の体験に参加することができます。ハチポはハチペイでの支払いには使えませんが、ちょっとした手伝いごとやまちに良いことに参加するともらえるもので、もらったハチポはお店やイベントなどで「お金で買えないうれしい体験」をするために使えるという仕組みです。たとえば、マイバックを持っていくとコインがもらえ、そのコインをその店の裏メニューを教えてもらうことに使うことなどができます。新しいデジタル地域通貨の仕組みを活用して、渋谷区ふれあい植物センターに入場すると少しハチポがもらえたり、ちょっとした意識の改革や行動の促進につなげたりするなど、渋谷区から環境の意識醸成や発信を行なっていけたらと考えており、今はまさに過渡期にあるのかもしれません。

【古沢】今のお話にもあったように、実は渋谷には潜在的に面白い動きがたくさんあります。ふれあい植物センターは、國學院大學の坂〔國學院大學前交差点～明治通り東交番前交差点間の坂道〕を下りた先にありますが、大学ではあまり知られていませんので、リニューアル前のふれあい植物センターに学生を連れていったこともありました。とてもユニークで良いものがたくさんあって、環境教育の場として地域の中でつながっていました。松嶋さんは、たしかふれあい植物センターの場所を使って、シブサスの催しをいろいろ実施していましたね。

【松嶋】そうですね。勉強会のほか、園内のツアーを行ないました。皆さん、國學院大學から近いと意外と行かない

ので、改めて「熱帯植物がこんなに渋谷のど真ん中にあったんだ」と感じていました。リニューアル後の新しいセンターは、またコンセプトを変えていくようですが、いずれしても渋谷のど真ん中で緑や自然に触れられる空間というのは、やはり気づきにとって大事なものだと思います〔リニューアル後の植物園は、「農と食の地域拠点」をコンセプトとして「栽培・収穫・消費」を体験できるイベントや情報発信に努めている。https://sbgf.jp/〕。

【古沢】第一回「しぶカフェ」では、シブサスとともに、特に環境問題を中心にお届けしました。かつてアメリカの学生がアースデイを起こしたように、若い世代こそが環境問題に対して「もう待っていられない」と立ち上がり、世界中にそのアクションを広げていきました。有名な例でいえば、平成四（一九九二）年の地球サミットの時も、カナダの日系のセヴァン・カリス＝スズキ〔Severn Cullis-Suzuki. 昭和五四〈一九七九〉年～現在〕さんが一二歳でスピーチをして、大人たちの将来世代への無責任さを糾弾し、それを受けて環境問題への取り組みに火がつきました。

今は、フライデーズ・フォー・フューチャーに火をつけたスウェーデンのグレタ・トゥーンベリさんも一六歳の時、令和元（二〇一九）年の「国連気候行動サミット２０１９」に合わせてスピーチをして、世界中に環境問題を喚起しました。今日も俵さんが一生懸命発信されていましたが、若い人たちができることを、身近なところから一つ一つやっていかないと、なかなか将来への展望を見出すことがきません。今回は國學院大學を中心にやっていますので、大学を含めた身近なところで、俵さんはこれからどのようなアクションを考えていますか。

【俵】國學院大學でできる具体的なことについては、まだ思い浮かんでおりません。ただ、古沢先生がおっしゃったように、やはりできるところから、身近なところから変えていくことが大切だと思います。ですから、普通の学生でも社会にいろいろなアクションができることを、もっと身近な人に伝えていければと思います。

【古沢】大学を越えたネットワークでは気候変動についてはつながっていましたね。

【俵】そうですね。「自然エネルギー大学リーグ」という、国内の大学と企業をつなぐネットワークがあります〔https://www.re-u-league.org/〕。これは、学内施設の電力を再生可能エネルギーに変えようとしている団体で、ここに國學院大學も加わっていければと思います。

【古沢】どうもありがとうございました。

最後に佐藤さん、松嶋さんからひと言ずついただきたいと思います。まずは佐藤さんから「渋谷区は頑張っています」というひと言をいただければと思います。

【佐藤】今日一番うれしかったのは松嶋さんに「若者」といわれたことでした。もうアラフォーになりますが、「まだまだ頑張るぞ」とやる気が湧き出ました（笑）。しかし、自分のことでは頑張ることができるのに、環境のことになると、やはり意識がなかなか追いついていません。意識への介入はなかなかできないと思いますが、ここをうまく結びつけるようなことが行政にもできたらと考えています。ですから、そこに踏み込むようなことを渋谷区が率先して行ない、それがさらにほかの自治体にも波及していくような環境行政を行なえたらとも思います。

【古沢】次に、ネットワーキングされている松嶋さんからひと言お願いします。

【松嶋】おそらくこの「しぶカフェ」をご覧になっている若い人たち、学生の皆さんは、まだ心に迷いがあると思います。一番大事なのは、「何か変わっている、地球が変わっている、我々の生活も変わっている。そして、何もしないよりも何かしたほうが、きっとそこには光が見える」ということです。これが、長年この業界にいる私がいえるひと言です。ぜひ皆さん力を貸してください。そしてまた一緒に悩みましょう。

【古沢】皆さん、どうもありがとうございました。

以上、第一回「しぶカフェ」をお届けしました。環境問題はなかなか深刻な問題ですが、これこそ未来に向けて私

たちが取り組まなければならないものです。今日のいろいろな情報や動きはメディア、インターネットでオープンになっていますし、先ほどのラジオの話題にもあったように、渋谷の足元にもいろいろな動きがあることをぜひ皆さんに知っていただいて、また共に多様な形でつながっていけたらと思います。ありがとうございました。

《コメント》

秋野　淳一

【秋野】第一回「しぶカフェ」はいかがだったでしょうか。今回の内容をお聞きすると、多様性のあるまち渋谷において、さまざまな人たちの接点となりうる、ハブのようなものをつくる必要性について、改めて考えさせられました。今回は、持続可能な地球環境に関わるお話が中心となり、具体的なアクションの方法についても教えていただきました。さまざまな人たちの接点となりうる、啓発の場づくりのアイデアも出されました。こうした常日頃からの多様な人たちの「つながり」がひいては渋谷の防災・減災につながり、コミュニティの持続可能性にもつながります。立場の異なる人たちが接点を持つことで新たなイノベーションに発展していく可能性も生まれることでしょう。

実は渋谷には、伝統的な神社やお祭り（金王八幡宮〔渋谷区渋谷三丁目〕例祭、渋谷氷川神社〔渋谷区東二丁目〕など）が存在しています。そうした場も多様な人たちを結ぶ接点になり得ると考えられます。そこに今回のお話にあった新たな地球環境に関する啓発の場をクロスさせていけば、渋谷の住民との接点ももっと形成できるのではないかと感じました。渋谷の伝統文化や歴史にも、まなざしを向けるといいのかもしれません。そしてそれは、渋谷のまちづくりだけの話にとどまらず、日本全体にもつながっていくものと考えられます。

【追記】
本記録は、國學院大學研究開発推進センター「〈ＳＤＧｓ〉と建学の精神」研究事業（研究代表・松本久史國學院大學教授）の研究成果の一部である。